

真高寺だより

第17号 平成24年1月1日発行

発行所：真高寺（伊澤孝順住職）

住 所：市原市飯給1143

電 話：0436-96-0058

*発行責任者 根本 貞夫

*編集責任者 木村 孝一



(写真提供：山内憲章氏)

謹賀新年



あやか

伊八の龍に肖って

総代会長 根本 貞夫

あけましておめでとうございます。どうか本年が私たちにとって、心から喜ばしい辰年となりますよう祈念しております。

それにしましても、去年は実に多事多難な年でした。その後遺症はまだまだ続いています。しかし見方を変えれば、それを乗り越えて行く智恵を共有できる貴重な年でもあります。本堂正面の伊八の龍に肖って、心のゆとりをしっかりと取り戻すための、大きな智恵を身につける年にしたいと願っております。そして、そうした拠り所の一つが私たちの真高寺でありたいと思っております。

ところで、昨年秋、山門解体修理事業で大変お世話になった、市原市文化財センター所長の田所真さんが久しぶりに真高寺へ来られました。その折、山門右手前の出羽三山碑に関するお話をされました。碑文には、周辺十三村共同で安永6年(1778)に願主・田邊久左衛門(大戸)により建てられたとありました。また西飯給公民館横の行人塚は、天明6年(1786)に八日講中により建てられたとありました。その頃は、天明3年(1783)の浅間山大噴火により、気候変動が何年にも渡って続き、そのため凶作により各地で飢饉が頻発し、世情は大きな不安に包まれていました。そうした中で、山門が寛政5年(1793)～7年(1795)、また山門前の「四国八十八所尊」や仁王像裏側左右の「四天王像」が寛政7年に作られました。こうしたことを考え合わせると、大きな安心を得るために、当時の人々が信仰を拠り所にして智恵を出し合ったことが伺えます。

私たちも単に法事だけの関わりとしてではなく、心の拠り所として日常生活の中でお寺と心地良い関係を作り上げて行きたいと考えております。皆さんの変わらぬご理解とご支援をお願い申し上げます。

道元禪師のおことば

「大恩を報謝せん」(行持・下)

おことばの意味

「生きる」と「よく生きる」とは違う。「生きる」とは、食べる金の事だけを考えていればよい。「よく生きる」とは、二度とない自分の人生を生み育てている宇宙の命を、自分の胎内に直視し、深く感謝を捧げて生きることだ。「生きる」と「よく生きる」の二つがよく調和されてこそ、幸福な人生なのだ。



東日本大震災に想う

住職 伊澤孝順

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

早いもので、大震災が起きてより九ヶ月余、少しずつ災害地復興も進んで来ていますが、被災者にとっては、この冬の寒さが一層厳しくなると思います。

多くの宗門寺院が壊滅する中で、半壊の被害を受けた寺院では、当初、避難所であったり、仮安置所として対応し、若手青年僧が炊き出しやボランティア活動を献身的に行っていました。

しかし知人の話では、現地に立って見ると、余りの被害の大きさに言葉を失ったと話すほど、これから長い時間を掛けての復興となるでしょう。

何時、我々にも災いが降り掛かるか分かりませんが、お互いの協力をもって被害者全ての人達が幸福に過ごせますように、今年も祈念し、支援して行きたいと思います。

山内あれこれ

河辺綏代 お世話になりました



養老地区総代の河辺政利氏が、一身上の都合で昨年末に退任されました。後任には泉水悦郎氏が就任されます。

義援金を届けました

昨年の盆明け8月26日、市役所に佐久間市長さんを訪ねて、東日本大震災で被災した人々へ50万円の義援金をお渡ししました。このお金は主として施食会で皆様から先祖供養に頂いた塔婆代を充てたものです。東北が元気を取り戻すまで、毎年支援して行こうと考えております。



副市長さんが来山しました

昨年の9月7日、国土交通省から市原市にいられている副市長の三橋さゆりさんが、文化財センターの田所真さんの案内で、山門や本堂の伊八の龍等を見学されました。(写真は左から、田所文化財センター所長、三橋副市長、元起生涯学習部次長、土屋ふるさと文化課長、浅利係長)



今年も立派なお飾りです

山門のお飾りは松本金蔵さんが、毎年美しく飾り付けて下さいます。今年も創意工夫をほどこした見事な山門飾りができました。



皆様のご寄進 ご奉仕に感謝

ぬかるみ

泥濘解消です

本堂の前庭がぬかるんで困っていましたが、ところ、昨年の暮れに杉田建材様より沢山の砂利をご寄進いただきました。これを松本金蔵さんと月出の関左官屋さんの二人が敷き込んでくれました。これで泥濘解消、安心して新年を迎えられます。



車の出入りに一安心です

何度かの大雨で第二駐車場の入口が洗掘され、車の出入りに大きな支障が生じていました。10月13日、松本金蔵さんと花澤基さんの二人が、洗掘防止のコンクリート材を埋設し、さらにU字溝を敷設して進入路の整備をしてくださいました。また併せて、霊園入口右側の排水路のU字溝を塞いでいた桜を伐採してくれました。



立派なテーブル、椅子、掲示板です

総代顧問の佐久間常壽前会長より、急逝された奥様「真玉院賢悠慈訓清大姉」のご供養にと、9月23日に漆塗りの高座テーブル6卓、椅子36脚、そして参道入り口に寺院用掲示板を寄進くださいました。



元気に根付きそうです

総代の花澤基さんが、11月10日に紫陽花の苗木50鉢を寄進くださいました。そしてこれを裏の山道に植栽してくれました。寒さにも元気です。



三体の龍を知っていますか

真高寺には凄い龍が三体あります。一つは山門一階の狩野景川の天井絵です。二つ目は本堂の梁に隠れた初代伊八の凄い龍です。普段は奉納幕に隠れて見えません。三つ目は本堂左手の庭の俱利伽羅不動の龍です。これは俱利伽羅明王の化身で、不動明王の宝剣（降魔剣）に巻き付いた姿です。



紅葉の名所も直です

総代会長の根本さんが言っておりました。「今年は色々な所を旅したけれども養老溪谷の紅葉は、その中でも美しかった。真高寺も直に紅葉の名所になるだろう。どんな木も植えなければ、木にはならない。」正に至言です。きっと、近い将来、春の桃や桜、夏の紫陽花、そして秋から冬にかけての紅葉の美しい寺となるでしょう。



土足厳禁としました

今まで山門の二階へ許可を得て上る際に、靴のまま上がることを認めておりました。それは砂埃で足が汚れるとのことからでした。しかし、仁王様や四天王の居られる上の階に土足であがることは、やはり好ましいものではありません。そこで、土足は厳禁といたしました。なお、二階は出来る限り箒で砂埃を掃き出すようにしています。

イノシシには困りものです

境内のあちこちでイノシシが闊歩しています。どうやらミミズを捕食するために、湿った所の土を掻きまわしているようです。具体的な被害が出ない内に何とかする必要があります。そうです。



鍋物に使えますか？

鈴なりの蜜柑ですが、これが極めて酸っぱい。イノシシもカラスなどの鳥も食べません。何か活用方法があったら教えて下さい。ともかく沢山実を付けました。



福達磨を差し上げます

毎年、除夜の鐘を打ち終えて、それに続き本堂で新年祈祷会を行っております。皆様のこの一年が良き年でありますよう、今年から、新年祈祷会に参加された参拝者の皆様（各世帯）に、お寺より祈祷達磨（ダルマ）を先着順でお渡しすることといたしました。帰宅後に片目を入れて、希望が叶ったら、再び除夜の鐘の時に寺に持参して焚き上げ、新しい福達磨を持参されるようにして下さい。



平成24年の行事について

初詣は総持寺と最乗寺です



恒例の総持寺新春参詣旅行を1月14日（土）に催します。今年は先ず「総持寺」へ行き、昼食を「いこいの村あしがら」で摂り、その後、南足柄の天狗寺として有名な大雄山最乗寺を参拝いたします。参加費用は12,000円、**参加締切りは1月7日**です。申込は直接お寺まで。

花まつり法会は4月8日です



お釈迦様の御誕生日の4月8日に花まつり法会を行います。当日は午前10時より本堂にて各家の位牌の前で先祖供養を行います。続いて子供達に飾ってもらった甘茶仏の花まつり法会を行います。当日の参拝者には、お菓子と花の苗をお渡しします。皆様のご来山をお待ちしております。

平成22年・一般見学者
(市原市内49名、県外86名)
7月3日 千葉県文化財保護協会
(第1回文化財めぐり) 45名
10月11日 ガール・スカウト
千葉65団
ブラウニー・テンダー・フット
12月3日 はなみずきの会 8名
12月4日 ひまわり体操グループ
8名

山門見学者(見学者ノートより)

平成23年・一般見学者
(市原市内38名、県外75名)
2月13日 小湊鉄道・駅舎のちよい旅
4月24日 千葉県生協
春のネイチャー・ウォーク
9月12日 名月俳句会
11月15日 市原市シルバーカレッジ
歴史講座の会 35名
11月16日 NHK千葉支局主催の
歴史散歩の会 30名

檀信徒の皆様へ

ご貴家で、万一ご不幸がありました時は、必ず早めに寺の方にご一報下さるようお願いいたします。

また、寺にご意見やご不明な点がありましたら、遠慮なく手紙や葉書、或いはファックスなどでお知らせ下さい。

編集後記

気軽にお寺に出向けるようにするためには、何かの切っ掛けが必要です。その意味で、新しい行事として始めた新年祈祷会や花まつり法会は、大きな意味を持っています。まだまだ広く知られてはいませんが、継続して行くことで真高寺の年中行事へと根付かせて行くべきでしょう。そして例えば、七福神巡りや豆まき、灯籠流し会など、まだまだ皆さんとお寺の関わりを広げ、深める行事を考えることも必要でしょう。

一方で、こうしたお寺としての行事の他に、寺の施設を開放して、カルチャー教室としての取り組みも進めるべきです。幸い多くの皆様のお陰で、本堂脇の縁台が畳敷きの立派な部屋に生まれ変わり、しかも今回テーブルと椅子の寄進を受けて、カルチャー教室を開くことが可能となりました。そこで、真高寺をより広く紹介するリーフレットの作成やホームページの開設等を通じて、一層私たちに身近な心の拠り所にして行きたいものです。